

院内城跡

— 広島市安佐北区深川町所在 —

2021

公益財団法人広島市文化財団

は し が き

広島市安佐北区高陽地区は、中央を流れる三篠川が太田川と合流して広島湾へと流れ、周囲には山並みが連なる自然豊かな場所です。古くは三篠川の舟運の中継地として、現在ではＪＲ芸備線や県道 37 号（広島三次線）、県道 70 号（広島中島線）といった幹線が通り、交通の要衝として栄えてきた場所でもあります。かつては、田園風景が広がる農村地帯でしたが、1970 年代以降、広島市のベッドタウンとして大規模な宅地開発が行われ、市街地化が進むとともに、人口も増加しました。

これまでの発掘調査によって、当地区における古代から中世にかけての人々の生活の様子が少しずつ明らかになってきました。今回の調査は、中世の山城跡のごく一部の範囲でしたが、この地域における中世の山城の在り方を考察するうえで、貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この調査を行うにあたりご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様、ならびに調査に従事していただいた皆様に、厚くお礼申しあげます。

令和 3 年（2021）3 月

公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

例 言

1. 本書は、広島市安佐北区深川町における送電用鉄塔建替工事に伴い、令和2年度に実施した院内城跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、中国電力ネットワーク株式会社から委託を受け、公益財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅲ－2を荒川美緒が、Ⅱ・Ⅲ－1・Ⅳを牛黄蓍豊が行い、編集は牛黄蓍が実施した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は秋政久裕・牛黄蓍・荒川が、遺物の実測は荒川が、遺物の写真撮影は中山昭大が実施した。
5. 陶磁器類等の鑑定は、県立広島大学教授 鈴木康之先生にご教示いただいた。
6. 発掘調査に係る基準点の設置は、株式会社四航コンサルタントに委託した。
7. 本書に掲載したドローンによる航空写真の撮影は、株式会社四航コンサルタントに委託した。
8. 第1図は、国土地理院による25,000分の1の地形図「中深川」（平成26年調整・平成26年11月1日発行）を複製したものを、第2図及び第5図は、広島市による2,500分の1の広島市平面図（I-11・I-12）を合成したものを使用した。
9. 第4図における基準点のデータは下記のとおりである。
基準杭1： $X = -167958.330$ $Y = 34309.655$
基準杭2： $X = -167966.825$ $Y = 34325.123$
基準杭3： $X = -167982.519$ $Y = 34324.826$
基準杭4： $X = -167969.871$ $Y = 34287.335$
基準杭5： $X = -167945.012$ $Y = 34311.667$
10. 本書に掲載した挿図の方位は、第1・2・5図は真北、その他は図中にて方位を示している。
11. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、公益財団法人広島市文化財団文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 遺構と遺物	9
IV まとめ	14

挿 図 目 次

第1図 院内城跡周辺主要遺跡分布図	8
第2図 院内城跡周辺地形図	9
第3図 出土遺物実測図	11
第4図 院内城跡調査区周辺地形図	13
第5図 院内城跡略測図	16

付 表 目 次

第1表 周辺山城跡一覧表	7
第2表 出土遺物観察表	12

図 版 目 次

図版 1a 院内城跡遠景（航空写真・東から）	
図版 1b 院内城跡遠景（航空写真・北東から）	
図版 2a 院内城跡近景（航空写真・南東から）	
図版 2b 院内城跡近景（航空写真・西から）	
図版 3a 調査区 A（調査前・東から）	
図版 3b 調査区 A（調査前・西から）	
図版 4a 調査区 A（調査後・東から）	
図版 4b 調査区 A（調査後・西から）	
図版 5a 調査区 B（調査前・北東から）	
図版 5b 調査区 B（調査後・東から）	
図版 6 出土遺物	

I はじめに

調査に至る経緯

平成 29 年 3 月 17 日、広島市安佐北区深川町付近での送電用鉄塔建替工事（220 k V 山陰幹線 No. 351 ～ 364 経年鉄塔建替工事）に伴い、工事主体となる中国電力株式会社（令和 2 年 4 月 1 日に中国電力ネットワーク株式会社に事業承継。）から、広島市教育委員会（市民局文化スポーツ部文化振興課文化財係が補助執行、以下「広島市文化振興課」とする。）に対して、工事計画地内における文化財等の有無及び取扱いについて照会があった。工事計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である院内城跡が含まれるため、広島市文化振興課は同年 4 月 25 日工事計画地内の現地踏査を実施し、その結果、工事計画地内において院内城跡を確認した。これを受けて、その取扱いについて協議が行われたが、工事の計画を変更して遺跡を現状保存することは困難であるため、やむを得ず記録保存を図ることとなった。

そこで、令和 2 年 3 月 25 日、中国電力株式会社は公益財団法人広島市文化財団に発掘調査を依頼し、これを受けて同年 4 月 17 日に契約を締結した。現地調査は、同年 5 月 19 日から同年 8 月 4 日までの期間実施した。整理作業及び報告書作成は、同年 8 月から令和 3 年 3 月にかけて実施した。

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者 中国電力ネットワーク株式会社

調 査 主 体 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

調査関係者 北吉 孝行 理事長

田原 範朗 常務理事

福永 治 常務理事

山地 正宏 常務理事

大森 寛 常務理事

江崎 一博 文化科学部長

菊楽 肇 文化財課長

高下 洋一 文化財課課長補佐

調査担当者 秋政 久裕 文化財課主幹学芸員

牛黄蓍 豊 文化財課主任指導主事

荒川 美緒 文化財課主任学芸員

調査補助員 植田 敏則 大嶋 忠久 川本 博久 熊谷 公德 桑原 晴美 古寺 正次

高野 茂樹 寺田 誠 中川 ゆみ 宮地 美穂 守岡 宏明

整理作業員 佐伯 ひとみ 菅原 彰子 住川 香代子 橋本 礼子

なお，中国電力ネットワーク株式会社，広島市文化振興課をはじめ多くの方々には，調査を円滑に進めるために多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに，資料整理にあたって遺物について，県立広島大学教授 鈴木康之先生から貴重なご指導，ご助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

1 位置と自然的・地理的環境

院内城跡は、広島市安佐北区深川町字城平に所在する。

本城跡が所在する広島市安佐北区は、市の最北部に位置し、白木・高陽・可部・安佐の4地区からなる。そのうち、本城跡は高陽地区に位置しており、東は東広島市、南は広島市安芸区及び東区、西は広島市安佐南区に接する。

周辺の地形を見ると、安芸高田市及び東広島市を水源として、東から西方向に蛇行しながら流れ、太田川に合流する三篠川と、その周囲に連なる山地と、細長く狭い平地からなる。三篠川右岸には、鬼ヶ城山（標高 737 m）と派生する尾根筋が広がり、左岸には東から高鉢山（標高 726 m）、長者山（標高 571 m）が連なり、三篠川に注ぐ小河川である湯坂川と小河原川が形成する谷底平野にはさまれる形で、中山（標高 283.6 m）、椎村山（標高 282 m）の小山が並び、その西には木ノ宗山（標高 412.7 m）、二ヶ城山（標高 482.8 m）と続く。

高陽地区の大部分はこれらの山地に囲まれ、西側を三篠川と合流した太田川が南流し、広島湾に注ぐ。集落及び耕地は、三篠川及び太田川左岸沿いの沖積地と、小河川によって形成された谷底平野を中心に営まれている。1970 年代以降、二ヶ城山から派生する低丘陵地を中心とした大規模な住宅地開発に伴い、旧来の地形はほとんど失われ、急速に市街地化が進行した。近年、本城跡の位置する深川地域においても耕地が減少し、宅地化が進んでいる。

2 歴史的環境

本城跡の所在する高陽地区を中心とした歴史的環境について概観してみたい。

縄文時代

この時代の明確な遺構は確認されていないが、弘住遺跡からは後期のものと考えられる土器片 1 点が出土している¹⁾。

弥生時代

この地域では弥生時代前期の遺構は確認されていないが、弥生時代中期の遺構としては、弘住遺跡の配石遺構²⁾、大明地遺跡の住居跡³⁾が報告されている。

先述した二ヶ城山から派生する低丘陵地における住宅地開発に伴う発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡が多数確認されており、その多くは、太田川とその支流が形成した沖積地での農業生産を基盤としながら低丘陵地上に住居を構えており、集落の規模も三～四戸を一単位とする小さな集団であったと推定されている⁴⁾。

埋葬に関する遺跡としては、西願寺山墳墓群、西願寺北遺跡、梨ヶ谷遺跡が特筆される。これらの遺跡からは、この地域特有の、太田川の河原石を積み上げた竪穴式石室が出土している⁵⁾。

また、上深川遺跡は、弥生時代後期の土器が多数出土し、太田川下流域の弥生後期の指標になった⁶⁾。

古墳時代

古墳時代前期の古墳としては、弘住古墳群や中小田第1号古墳で特筆すべき調査成果が得られている。弘住第3号古墳は3世紀末葉のものと想定される直径約25 mの円墳で、河原石と割石を使用した竪穴式石室からは、大型の鉄鍬型鉄製品などが出土している⁷⁾。また、調査は行われていないが、第1号古墳は全長約40 mの前方後円墳である。中小田第1号古墳は、4世紀中葉のものと想定される全長約30 mの前方後円墳で、竪穴式石室からは三角縁神獣鏡や車輪石が出土している⁸⁾。

古墳時代中期の古墳としては、中小田第2号古墳が特筆される。中小田第2号古墳は、5世紀中葉のものと想定される直径約20 m程度の円墳で、竪穴式石室から三角板鋌留短甲や横矧板衝角付冑などが出土している⁹⁾。

古墳時代後期の古墳としては、院内古墳、真亀第3号古墳、平野古墳などで横穴式石室が確認されている¹⁰⁾。

古代

10世紀に編纂された『倭名類聚抄』によると安芸国には、沼田・沙田・賀茂・安芸・佐伯・山県・高宮・高田の八郡があり、そのうち安芸郡は、漢弁郷・弥理郷・河内郷・田門郷・幡良郷・安芸郷・船木郷・養濃郷・安満郷・荒山郷・駅家郷の十一の郷に分かれており、高陽地区を田門郷に比定する説もあるが明証に欠けている¹¹⁾。

平安時代末期には、古代の郷が解体され各地に中央の大貴族や天皇家、有力寺社等を領主とする荘園が形成される。周辺地域においては、白木地区では三田郷が三田庄になり、可部地区では漢弁郷が可部庄に、弥理郷が三入庄になっているが、高陽地区においては明確な史料が存在しない¹²⁾。

中世

鎌倉時代の初期、幕府から各地の守護や地頭として任命された武士たちは、鎌倉時代末期以降任地に土着し、守護大名や国人領主として各地を治めるようになる。彼らは領地を守り支配するため盛んに山城を築いた。安芸では安芸守護を任じられた武田氏が金山城（安佐南区）を本拠として広島湾頭で勢力を拡大した。南北朝の動乱期には北朝方の守護として活動し守護を解任されたが、のちに佐東・安南・安北・山県の四郡を支配する分郡守護となったことから¹³⁾、安北郡に属していた高陽地区も武田氏の支配下に置かれたと考えられる。その後、15世紀から16世紀にかけての広島湾頭では、防長の大内氏、出雲の尼子氏、吉田郡山城を本拠とした毛利氏らを中心に、周辺の国人領主を巻き込んだ戦いが繰り返された。

ところで、本城跡の周辺には、三篠川沿いに七曲城跡、横山城跡、木ノ宗山城跡、檜原城跡、亀崎城跡、尾和城跡、太田川左岸に恵下山城跡、地藏堂山城跡など中世の山城跡が点在しており¹⁴⁾、発掘調査によって内容が明らかとなった城跡もある。

横山城跡は鬼ヶ城山から南にのびる丘陵の先端、標高71 mに位置しており、城跡のある丘陵の東側直下を三篠川が大きく曲流している。5か所の郭を階段状に並べた構造で、主郭からは、角礫による石垣と1間×2間の礎石建物跡が検出され、築城時期は室町時代後半ごろと推定されている。また、北には谷状地形をはさんで七曲城跡が存在しており、横山城が七曲城の前面を防備する目的

をもって築城されたと推定されている¹⁵⁾。

亀崎城跡は本城跡から三篠川をはさんで約 1 km 西方の丘陵上、標高 83 m に位置している。最高所の主郭を取り囲むように、4 か所の郭を設け、さらに 7 条の縦堀を放射状に配置し、堀切を主郭の西側に設けている。主郭は何度か修築されており、城郭の使用時期は室町時代後半から戦国期と推定されている。なお、尾根先端部の現在亀崎神社が位置する場所も、城跡の一部と考えられている¹⁶⁾。

恵下山城跡は太田川左岸の標高約 70 m の丘陵上に位置しており、対岸の八木城跡と対峙している。郭は 15 か所確認されており、主郭からは建物 8 棟分の柱穴群・柵列・石垣などの遺構が検出され、陶磁器・土師質土器・鉄製品などの遺物が出土した。城郭の使用時期は、鎌倉時代後半から室町時代中期ごろと推定されている¹⁷⁾。

地藏堂山城跡は恵下山城跡から諸木川をはさんで約 500 m 南方の丘陵上、標高 56 m に位置している。郭は丘陵高所を主郭として階段状に配置され、10 か所の郭が確認されている。陶磁器・土師質土器・鉄釘などの出土遺物から、恵下山城跡よりも新しい時期の城跡であることが推定されている¹⁸⁾。

近世

近世においては、高陽地区は深川筋とよばれ、狩留家村・小河原村・上深川村・中深川村・下深川村・諸木村・末光村・玖村・岩上村・矢口村・小田村が成立し、米作を中心に麦や野菜などの農業生産が盛んとなる。農業のほかにも、下駄や薪炭などの林産加工物の製造、三篠川や太田川での漁撈も盛んに行われた¹⁹⁾。

毛利輝元が広島城築城に際して太田川の舟運を利用したことが知られているが、三篠川においても舟路の開削が進められ、福島時代(1601 年～1619 年)に上深川まで、浅野時代の元禄 3 年(1690)には高田郡長田まで通船区間が拡大している。三篠川の舟運は年貢米の輸送が中心で、下深川村には藩の米蔵が設置され、狩留家村、上深川村、中深川村の船着場で上流域からの荷物を積替え、広島へ輸送する中継輸送が行われた²⁰⁾。このことから、三篠川流域を中心に集落が発展し、人々や物資が往来していた様子がうかがえる。

注

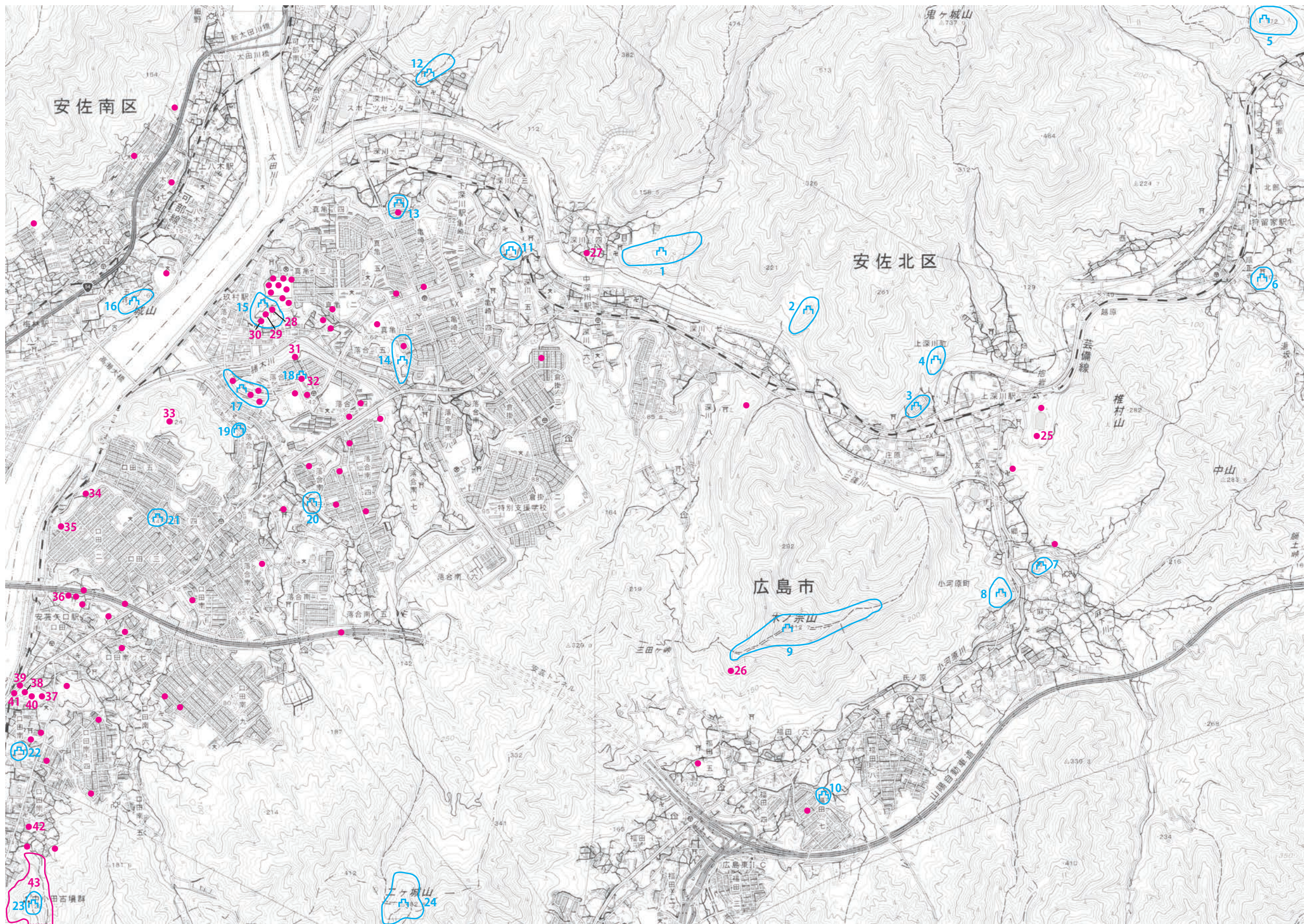
- 1) 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』 1983 年
- 2) 1 に同じ
- 3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 IV 1987 年
- 4) 広島市役所『高陽町史』 1979 年
- 5) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告』 1998 年
- 6) 広島県『広島県史』考古編 1979 年
- 7) 1 に同じ
- 8) 広島市教育委員会『中小田古墳群』 1982 年

- 9) 8に同じ
- 10) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図』X 2004年
- 11) 4に同じ
- 12) 4に同じ
- 13) 財団法人広島市文化財団 広島城『広島湾頭をめぐる歴史群像』2009年
- 14) 10に同じ
- 15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『横山城跡発掘調査報告』1984年
- 16) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年
- 17) 16に同じ
- 18) 16に同じ
- 19) 4に同じ
- 20) 4に同じ

第1表 周辺山城跡一覧表

番号	名称	所在地	現状	保存状況	立地	標高 (m)	比高 (m)	遺構
1	院内城跡	安佐北区深川	山林	一部壊	丘陵先端	164	140	郭, 堀切
2	檜原城跡	安佐北区深川	山林	良好	丘陵先端	106	86	郭
3	横山城跡	安佐北区上深川町	宅地	全壊	独立丘陵	71	34	郭, 石垣, 礎石
4	七曲城跡	安佐北区上深川町	山林	完存	丘陵先端	93	58	郭, 堀切
5	五菴城跡	安佐北区白木町三田	山林	良好	丘陵先端	173	112	郭, 堀切, 土塁
6	琴平山城跡	安佐北区狩留家町	山林, 寺社境内地	良好	丘陵先端	100	44	郭, 堀切
7	松尾城跡	安佐北区小河原町	寺社境内地	全壊	独立丘陵	—	—	—
8	片山城跡	安佐北区小河原町	山林	良好	丘陵先端	105	58	郭
9	木ノ宗山城跡	東区福田 安佐北区小河原町	山林	完存	丘陵頂部	413	390	郭, 堀切, 石垣, 土塁
10	宮原城跡	東区福田	宅地	全壊	—	—	—	—
11	亀崎城跡	安佐北区亀崎	宅地	全壊	丘陵先端	83	62	郭, 竪堀, 堀切
12	尾和城跡	安佐北区深川	山林, 寺社境内地	完存	丘陵先端	74	54	郭, 堀切
13	深川狐ヶ城跡	安佐北区深川 安佐北区亀崎	宅地	全壊	丘陵先端	56	42	郭
14	諸木城跡	安佐北区落合	宅地	全壊	丘陵先端	70	33	郭
15	恵下山城跡	安佐北区真亀	山林, 公園	完存	丘陵頂部	69	65	郭, 石垣
16	八木城跡	安佐南区八木	山林	一部壊	丘陵先端	69	50	郭
17	地藏堂山城跡	安佐北区落合	宅地	全壊	丘陵先端	56	42	郭, 堀切
18	山手城跡	安佐北区落合	宅地	全壊	丘陵先端	63	50	郭
19	土居山城跡	安佐北区落合	宅地	全壊	—	—	—	—
20	岩上城跡	安佐北区落合南	宅地	一部壊	丘陵先端	51	10	郭, 堀切, 竪堀
21	池田城跡	安佐北区落合	宅地	全壊	—	—	—	—
22	幾志山城跡	安佐北区口田南	宅地	全壊	丘陵先端	24	12	郭, 土坑, 階段状遺構
23	小田狐城跡	安佐北区口田南	山林	完存	丘陵先端	124	104	郭
24	二カ城跡	安佐北区口田南 東区馬木	山林	良好	丘陵頂部	483	253	郭

※上記一覧表は、広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第1集（1993年）をもとに作成。「—」は不明。



- 山城跡
1. 院内城跡
 2. 櫛原城跡
 3. 横山城跡
 4. 七曲城跡
 5. 五菴城跡
 6. 琴平山城跡
 7. 松尾城跡
 8. 片山城跡
 9. 木ノ宗山城跡
 10. 宮原城跡
 11. 亀崎城跡
 12. 尾和城跡
 13. 深川狐ヶ城跡
 14. 諸木城跡
 15. 恵下山城跡
 16. 八木城跡
 17. 地藏堂山城跡
 18. 山手城跡
 19. 土居山城跡
 20. 岩上城跡
 21. 池田城跡
 22. 幾志山城跡
 23. 小田狐城跡
 24. 二カ城跡
- 弥生時代・古墳時代の遺跡
25. 上深川遺跡
 26. 木の宗山銅鐸銅剣出土地
 27. 院内古墳
 28. 真亀 G 地点遺跡
 29. 真亀 H 地点遺跡
 30. 真亀第 3 号古墳
 31. 山手 A 地点遺跡
 32. 山手 B 地点遺跡
 33. 梨ヶ谷遺跡
 34. 西願寺北遺跡
 35. 西願寺山墳墓群
 36. 大明地遺跡
 37. 弘住第 1 号古墳
 38. 弘住第 2 号古墳
 39. 弘住第 3 号古墳
 40. 弘住第 4 号古墳
 41. 弘住第 5 号古墳
 42. 平野古墳
 43. 中小田古墳群

第 1 図 院内城跡周辺主要遺跡分布図 (S=1/25000)

Ⅲ 遺構と遺物

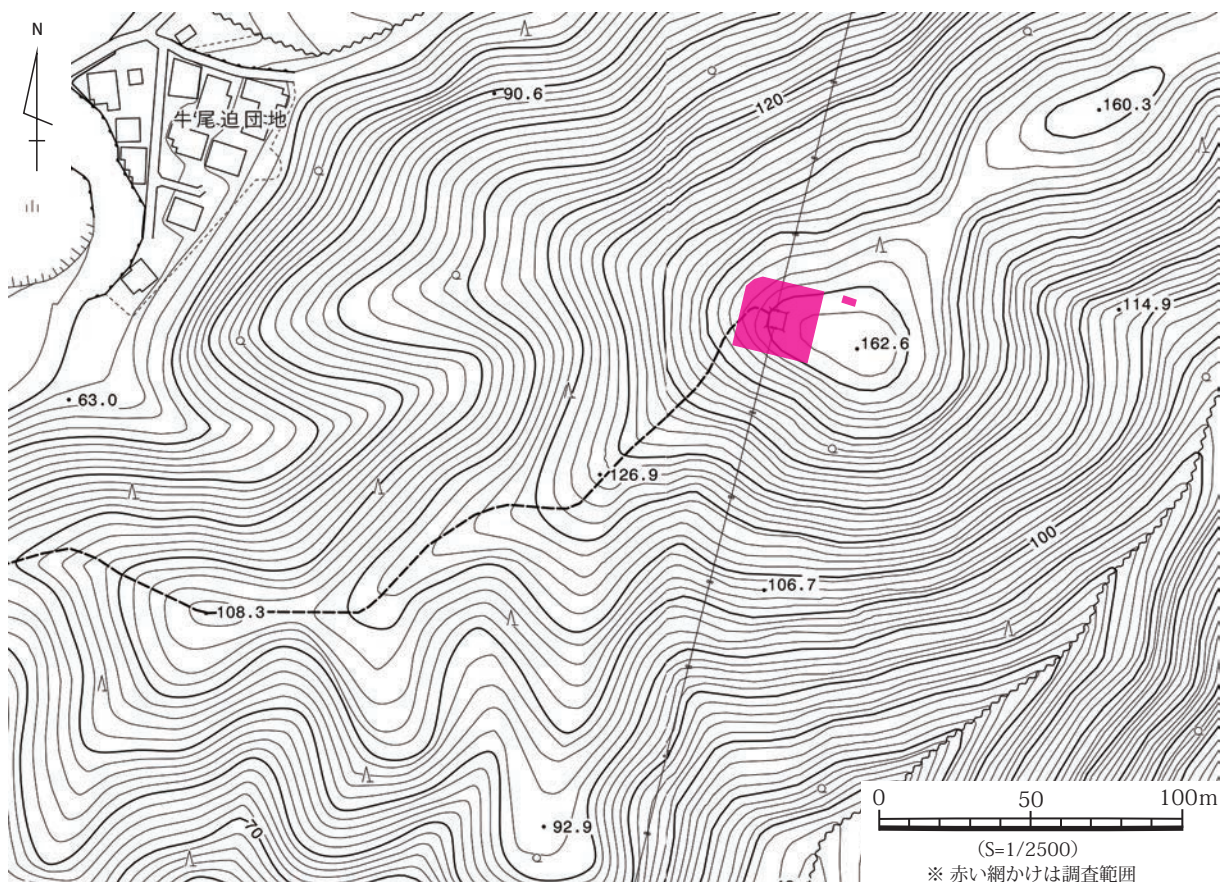
1 調査の概要

本城跡は、鬼ヶ城山から南西にのびる丘陵の先端付近に位置している。主郭の標高は約 164 m、付近の耕地との比高は約 140 m である。丘陵の南には、西流する三篠川が太田川に合流する直前に形成した小規模な沖積地が広がる。

調査区の最頂部にある平坦面西側部分には送電用鉄塔（昭和 47 年建設）があり、一部地形改変を受けていると想定された。また、調査区周辺では、郭と思われる平坦面、堀切、竪堀、土塁等が地表観察により確認できた。

今回の調査は、送電用鉄塔建替工事に伴うもので、工事の作業範囲となる斜面と平坦面の一部、及び索道施設設置に係る斜面の一部を調査範囲として設定した。調査区 A（主郭の平坦面の西側部分）と、調査区 B（主郭の北側斜面の飛び地）を調査対象とし、鉄塔直下及び周辺斜面については、鉄塔基礎の安全性を阻害する可能性があることから、掘削調査は行わず表土調査のみとした。また、調査範囲の西側斜面下部に石垣状の石積みが見られるが、表面調査を行った限りでは、院内城に関連するとの根拠は見出せなかった。調査範囲の総面積は 716 m² である。

調査の結果、調査区 A については、中央部および南側斜面上部に送電用鉄塔に付属する接地線が埋設されていたほか、広範囲に攪乱を受けており、明確な遺構は確認できなかった。また、調査



第 2 図 院内城跡周辺地形図 (S=1/2500)

区 B については、郭の一部と考えられる平坦面を確認した。

2 遺物（第 3 図）

今回の調査では、埋土中や表面採集により磁器，土器，陶器，土製品を確認した。細片のため図示しえないものもあるが，以下に概要を記す。

磁器

1 は青磁皿で，調査区 A 南東埋土から出土した。体部が内湾しながら立ち上がり，口縁部が外反する。内外面に施された釉薬は緑灰色，素地は灰色，焼成は良好堅緻，外面にはへら状工具で幅の広い蓮弁文が描かれている。14 世紀後半から 15 世紀にかけての龍泉窯の折縁皿と考えられる。

2 は青磁碗で，調査範囲北西端部で表面採集した。体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。内外面に施された釉薬は淡緑色，素地は灰色，焼成は良好堅緻，外面にはへら状工具で幅の狭い蓮弁文が描かれている。15 世紀終わりごろから 16 世紀にかけての龍泉窯の製品と考えられる。

土器

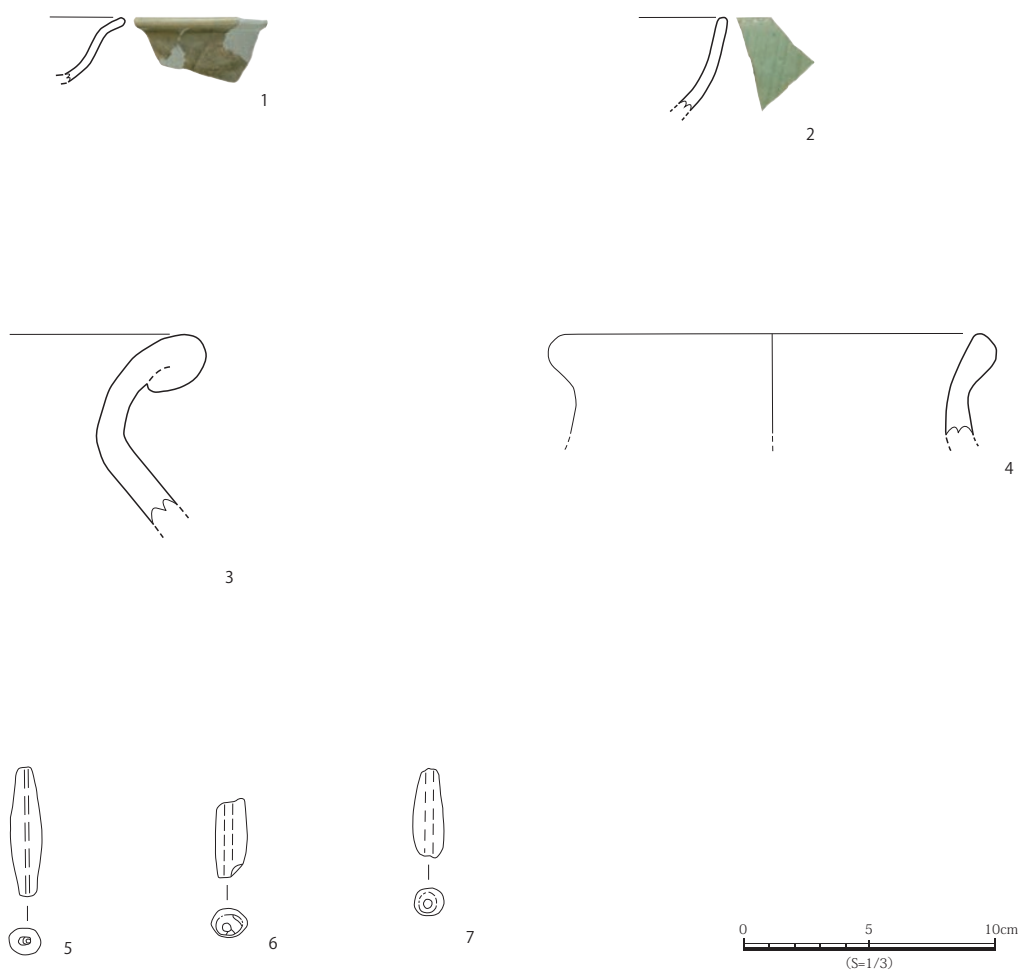
3 は甕で，調査区 B 埋土から出土した。口縁部は「く」の字状に外反し，端部は外側に折り返されやや上下に伸びた玉縁となる。焼成不良のため褐灰色の色調を呈しているが，14 世紀後半から 15 世紀にかけての備前焼と考えられる。

陶器

4 は壺で，調査区 A 南東埋土から出土した。口縁部はやや外反し，口縁端部は丸くおさめる。素地は灰色，焼成は良好。外面の摩耗が著しいが内外面に黒褐色の釉薬が施されている。褐釉陶器と考えられる。

土製品

5・6・7 は土錘で，5 は調査区 A 南東埋土，6 は調査区 A 北東隅埋土，7 は調査区 A 北西埋土からそれぞれ出土した。いずれも中ほどが張り出す管状を呈し，焼成は良好で色調は橙。魚網用の錘と考えられる。

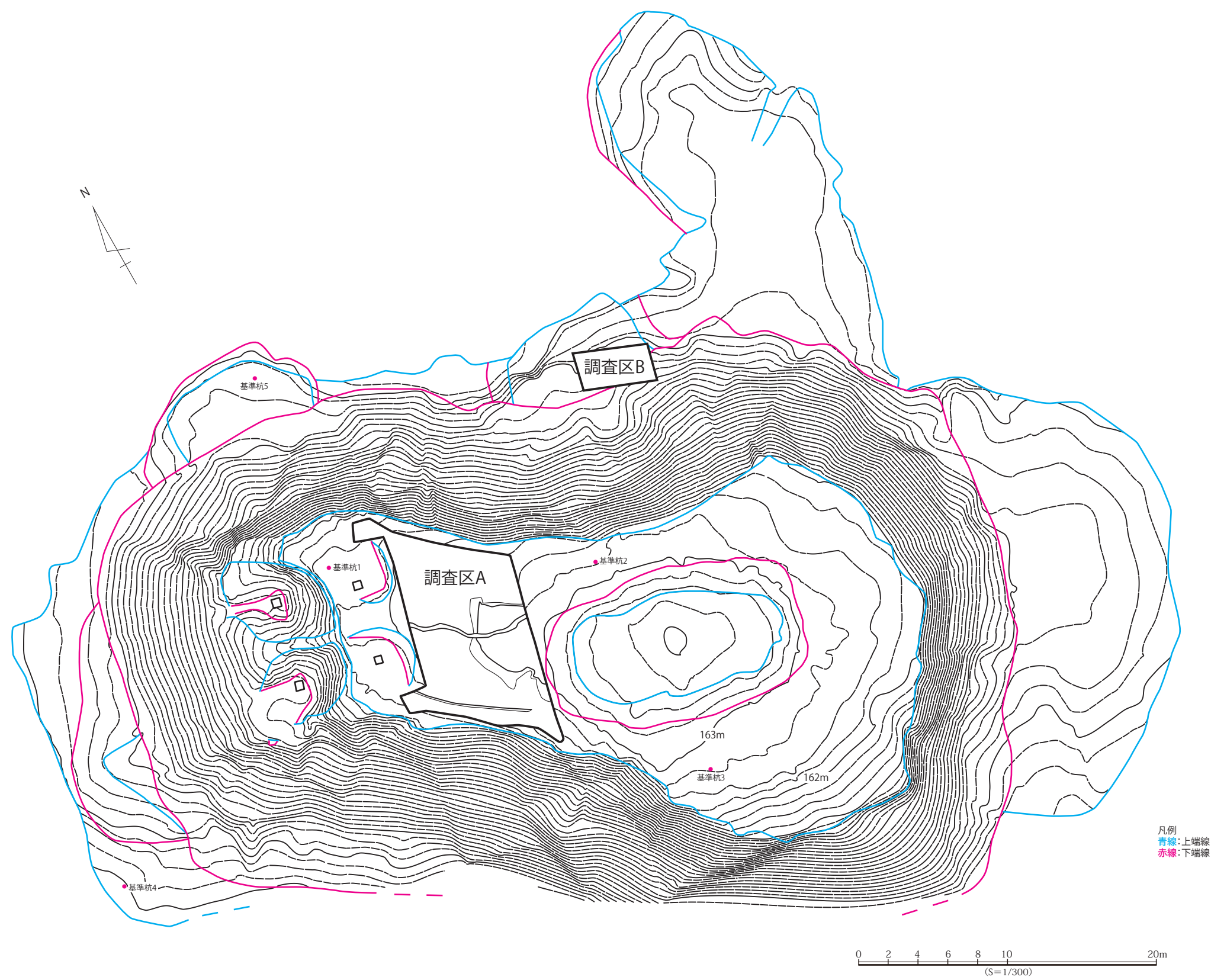


第 3 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

第2表 出土遺物観察表

資料番号	地点	陶磁別等	器種等	法量	形態	成形・調整	備考
1	調査区 A 南東埋土	青磁	皿	口径：－ 底径：－ 器高：－	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。	外面にヘラ状工具で蓮弁文を描く。内外面とも緑灰色の釉薬が施されている。	色調：緑灰色（釉） 素地は灰色 焼成：良好堅緻 胎土：良好精緻
2	調査範囲 北西端部 表面採集	青磁	碗	口径：－ 底径：－ 器高：－	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	外面にヘラ状工具で蓮弁文を描く。内外面とも淡緑色の釉薬が施されている。	色調：淡緑色（釉） 素地は灰色 焼成：良好堅緻 胎土：良好
3	調査区 B	土器	甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は外側に折り返して玉縁を形成する。	ロクロ成形後、内外面ともヨコナデ。	色調：褐灰色 焼成：軟 胎土：不良（1～3 mm 程度の砂粒を含む）
4	調査区 A 南東埋土	陶器	壺	口径：(16.3) 底径：－ 器高：－	口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くおさめる。	内面ヨコナデ。内外面とも黒褐色の釉薬が施されている。	色調：黒褐色（釉） 素地は灰色 焼成：良好 胎土：良（1 mm 程度の砂粒を含む）
5	調査区 A 南東埋土	土製品	錘	残存長：5.2 最大幅：1.3 孔径：0.2	中ほどが張り出す管状を呈する。		色調：橙 焼成：良好 胎土：良（1 mm 程度の砂粒を含む）
6	調査区 A 北東隅埋土	土製品	錘	残存長：3.2 最大幅：1.3 孔径：0.3	中ほどが張り出す管状を呈する。		色調：橙 焼成：良好 胎土：良（1 mm 程度の砂粒を含む）
7	調査区 A 北西埋土	土製品	錘	残存長：3.5 最大幅：1.3 孔径：0.3	中ほどが張り出す管状を呈する。		色調：橙 焼成：良好 胎土：良好（微細な砂粒を含む）

※法量：計測単位はcm。（ ）内は推定値。「－」は破損により計測不能。



第 4 図 院内城跡調査区周辺地形図 (S=1/300)

IV まとめ

院内城跡は、表面採集された磁器などから、15世紀～16世紀を中心とする中世の山城と考えられる。今回の調査は、最高所にある郭の一部について行ったが、周辺の地形測量によって竪堀や郭の配置が確認されるなどの成果も得られた。これらの調査成果をもとに、本城跡について若干の検討を行い、まとめとしたい。

なお、郭や帯郭は、人工的な掘削により平面が構成されたと考えられる地形で判断したが、後年植林なども行われ、当時のままの山城の姿ではなく、その確定には発掘調査が必要である。

1 城郭の構成について

本城跡は、丘陵の尾根上の地形を利用して築かれた連郭式の山城で、大きく三つの郭群からなる。

最高所の郭群は、標高 152 m～164 mに位置しており、主郭と考えられる最高所の郭の周囲には一段下がって6か所の郭が配置されているが、南側斜面は大きく崩落して山城当時の地形は明確でない。最高所の郭の中央部東寄りに一部盛り上がった地形が見られるが、鉄塔建設工事の際の廃土が盛られた可能性も考えられる。また、北東側の尾根に2条、南西側の尾根に1条の堀切が認められる。さらに、東側には2条の竪堀と郭に付随する土塁が確認できる。このように、周囲を厳重に防御していることから、この郭群の重要性がうかがえる。

丘陵中腹の郭群は、標高 103 m～114 mに位置しており、4か所の郭と2か所の帯郭で構成される。また、最高所の郭群と丘陵中腹の郭群の間から南に下った標高 93 m付近に1か所の郭と1条の堀切が、丘陵中腹の郭群から南に下った標高 83 m付近にも1か所の郭が認められる。これらの郭は直下を西流する三篠川と周辺の平野部を一望できる。

丘陵先端部の郭群は、標高 72 m～90 mに位置しており、尾根の主軸に沿って6か所の郭が階段状に配置されている。郭群の東側には、尾根を大きく断ち切る1条の堀切が認められる。堀切の断面は薬研堀の形状を有し、幅約 8.7 m、深さ約 6.8 mで、幅約 0.8 mの土橋も確認できる。また、最下段南側の小郭南端から南にむけて延びる1条の堀が確認できる。

2 城郭の性格について

本城跡は、最高所の郭群から西方向の尾根上に二つの郭群が配置されているが、最高所の郭群と丘陵先端部の郭群の間には約 280 mの距離がある。周辺の山城跡においても、距離を置いて郭群が位置している類例がみられる。八木城跡では、山頂郭群から南西方向に三つの郭群が確認されており、山頂郭群と最南西部に位置する郭群との距離は約 210 mである¹⁾。亀崎城跡では、主郭から東方へ約 120 mの丘陵先端部、現在亀崎神社が位置する場所も郭であった可能性が指摘されている²⁾。また、横山城跡の約 150 m北側には、谷状地形をはさんで七曲城跡が位置しており、その立地状況から、七曲城跡と横山城跡の関係は、本城と支城の関係であったと推定されている³⁾。これらの城跡のあり方からすると、本城跡における丘陵先端部および丘陵中腹の郭群は、本城である最高所の郭群を防備するために築かれた支城と考えることもできる。

3 城郭の時期について

江戸時代に編纂された地誌である『芸藩通志』によると、院内城跡は牛尾古城跡と記されており、城主は牛尾遠江守幸清と伝えられる。牛尾氏は、出雲国大原郡海潮の武将であり、尼子氏の家臣として知られている。広島湾頭において大内氏と対立していた尼子氏は、武田氏を支援するため牛尾遠江守幸清を安芸国へ派遣しており、その際、院内城を拠点としていた可能性がある⁴⁾。

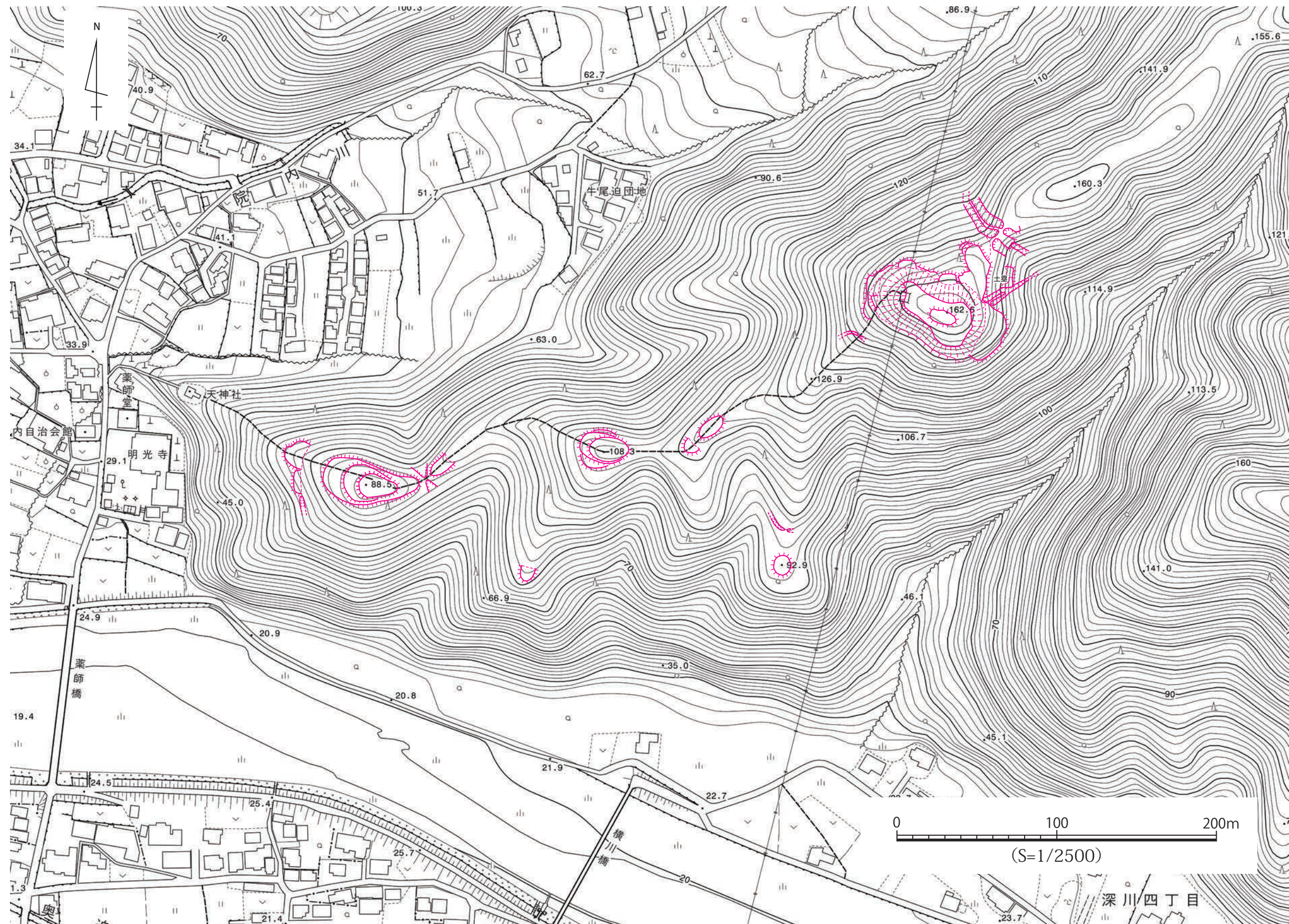
また、『郡中国郡志』によると、享徳2年（1453）に牛尾範郷によって狩留家の薬師堂が建立され、その後元亀2年（1571）に牛尾右京佐が再建したと伝えられている⁵⁾。このことから、戦国期以前から牛尾氏と本城跡周辺地域との関わりがあったことがうかがえる。

今回の調査では、遺構に伴わない埋土中からではあるが、14世紀後半から15世紀にかけてのものと推定される青磁と土器が出土し、表面採集ではあるが15世紀末から16世紀にかけてのものと推定される青磁が確認されている。これらは、前述した文献資料の記述とほぼ同時期のものである。

以上のことから、本城跡は15世紀から16世紀にかけて、牛尾氏の拠点として使用された城郭である可能性が高いと思われる。

注

- 1) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第1集 1993年
- 2) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
- 3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『横山城跡発掘調査報告』 1984年
- 4) 広島市役所『高陽町史』 1979年
- 5) 4に同じ



第5図 院内城跡略測図 (S=1/2500)

圖 版

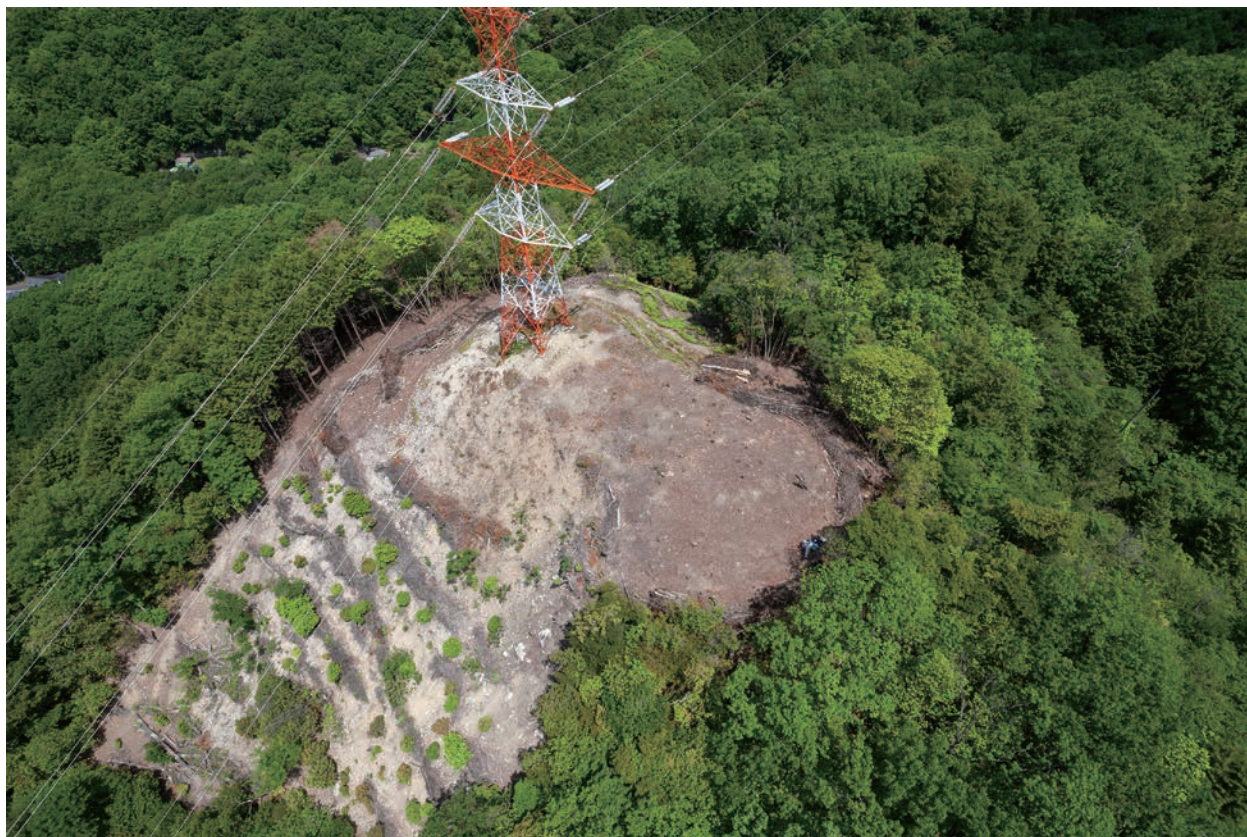
図版 1



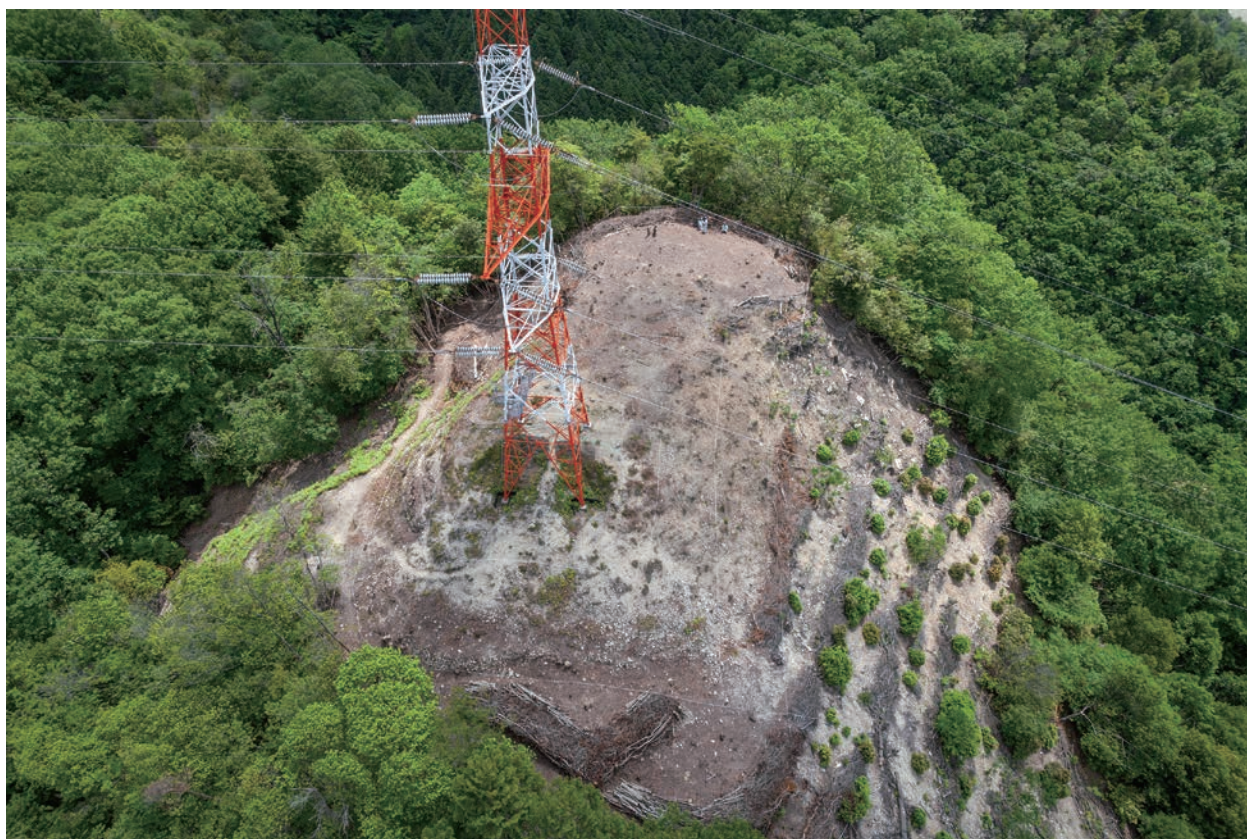
a 院内城跡遠景（航空写真・東から）



b 院内城跡遠景（航空写真・北東から）



a 院内城跡近景（航空写真・南東から）



b 院内城跡近景（航空写真・西から）

図版 3



a 調査区 A (調査前・東から)



b 調査区 A (調査前・西から)



a 調査区 A（調査後・東から）



b 調査区 A（調査後・西から）

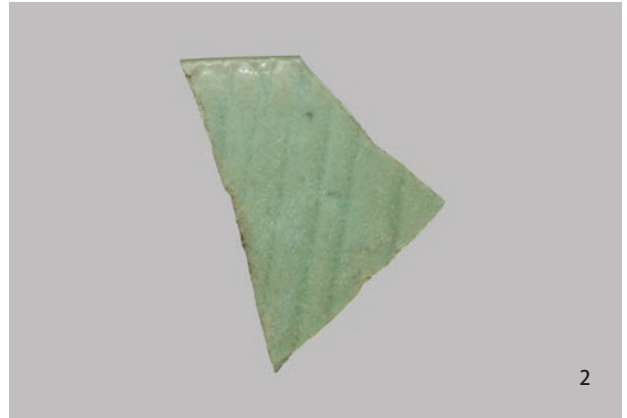
図版 5



a 調査区 B (調査前・北東から)



b 調査区 B (調査後・東から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いんないじょうあと　－ひろしましあさきたくふかわちようしよざい－							
書　名	院内城跡　－広島市安佐北区深川町所在－							
副　書　名								
シリーズ名	公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 10 集							
編著者名	牛黄蓍 豊　荒川 美緒							
編集機関	公益財団法人広島市文化財団　文化科学部　文化財課							
所　在　地	〒 732 - 0052　広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号							
発行年月日	西暦 2021 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
いんないじょうあと 院内城跡	ひろしまけんひろしまし 広島県広島市 あ　さ　き　た　く　ふ　か　わ　ち　よう 安佐北区深川町	34106	—	34° 29′ 07″	132° 32′ 25″	20200519 ～ 20200804	716 m ²	送電用鉄塔建 替工事に伴う 埋蔵文化財現 地発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特　記　事　項	
院内城跡	城館	中世	郭と想定される平坦 面		磁器・陶器・土製品			
要約 15 世紀から 16 世紀頃に営まれたと想定される山城跡である。陶磁器や土製品などが出土した。								

(公財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第10集

院内城跡

—広島市安佐北区深川町所在—

2021年3月

編集発行 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課
〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号
TEL 082-568-6511

印刷 株式会社中本本店
〒730-0004 広島市中区東白島町13番15号
TEL 082-221-9181